

つながる琳波スピリット かみさかせっか 神坂雪佳展

パナソニック汐留美術館 2022.10.29～12.18



「琳波」は、江戸時代初期に「本阿弥光悦」と「俵屋宗達」が創始し、「尾形光琳」を経て、「酒井抱一」、「鈴木其一」が江戸に定着させて花開いた造形芸術上の流派である。または美術家・工芸家らやその作品を指す名称であるとされている。

この流派は、大和絵の伝統を基盤として、豊かな装飾性・デザイン性をもち、絵画を中心として書や工芸を統括する総合性、家系ではなく私淑による断続的な継承であることが特徴であるとされている。

「神坂雪佳」(1866～1942)は、明治から昭和にかけ京都を中心に活躍した図案化・画家で、20世紀の幕開けと同時に、欧州で当時最先端の美術工芸を視察したことで、あらためて日本古来の装飾美術の素晴らしさを再認識した。

本展では、江戸時代の「琳派」の足跡を辿りながら、「雪佳」がデザインした工芸作品や絵画を紹介し、“近代琳派”と呼ばれるマルチアーティストの代表作を鑑賞することができる。展示品は、魅力的な琳派コレクションで知られる、「京都・細見美術館」の監修のもと、「雪佳」の代表的な作品に加え、画伯が手本とした琳派の美を伺わせる「本阿弥光悦」「尾形光琳」らの名品をあわせて、絵画・図案集・工芸品など「約80点」の展示である。

神坂雪佳 『百々世草』1909年頃 多色摺木版本



3冊の書籍には、愛らしい動物のくじ狗児、朝顔、鶴、牧童、神坂雪佳図案などの60種もの図案が収載されていて、画伯の美しい書籍として楽しめる。モチーフは大きく描かれていて繊細な文洋表現は控えめとなっていて、琳派研究の痕跡を随所に読み取ることができるが、大胆なトリミングや明解な描写、画面に漂うおおらかな雰囲気は、もはや「雪佳」独自の様式となっていて、楽しめる画伯の代表作となっている。